
強き燕は二度羽ばたく

龍々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

強き燕は一度羽ばたく

【Zコード】

Z3718Y

【作者名】

龍々

【あらすじ】

もしもピアノが弾けたなら…では無く、もしも海燕が生きていたなら、というお話。

外伝にて海燕が復活する過程の様な物が書かれていますので、是非そちらも御覧下さい

燕は再び飛ばしたい（前書き）

二次創作にて始めてのオリキャラが皆無な小説。

海燕力ツ「コイイよ海燕。

海燕様 (・・)キタ

(そ)

一一(下手く

それではござ御覧下さい

燕は再び羽ばたいた

冷たい雨が激しく降り注ぐ中、小柄な女の死神の上に抱きしめる様に一人の男の死神が凭れ掛かる。

男の背には刀が貫いており、それを握るのは女の死神。

男の死神の名前は志波海燕、妻を虚に殺された挙句その虚に自分の体を乗つ取られていた。

そこを部下の朽木ルキアに解放されたのだが、それは死と同義だった。

「朽木い……俺の我儘に付き合わせてひでえ日に遭わせちまつたな……わらい、きつかつたろ……？」

海燕はルキアの頭を撫で、せめてもの謝罪を述べる。

「ありがとな……お陰で、心は此処に置いていける……」

海燕はその言葉を最後に体を地面に落とし、息絶える。ルキアは海燕の名を叫んだ。

自分の心を襲う罪悪感を振り払つかのよ。

現世で死んだ者は虚に墜ちた者を例外として、通常は死神の手によつてあの世、つまりは尸魂界へ送られるのだが、尸魂界で死んだ者は尸魂界を構築する靈子に分解される。

所が海燕はそれらの例に当てはまらなかつた。

海燕の靈子は現世で再構築され、再び死神として蘇つたのだ。

「……現世か？どういう事だ？俺は死んだ筈だよな……」

海燕は訳が分からないと首を傾げる。

暫らくすると海燕の近くに抑えているが、恐らく隊長格と思われる巨大な靈圧が近づいてくる。

「えーと、この辺り何ですがねえ、副隊長クラスの靈圧が補足されたのは……」

その靈圧の主は下駄、甚平、田元を隠す帽子と正常な人間なら誰もが警戒する出で立ちをしている男。

怪しい男は辺りをキヨロキヨロと見回しながら道を歩いている。余りの怪しさに、海燕は曲がり角の向こうで靈圧を消しながら隠れている。

「……その程度で隠れたつもりか？」

突然、黒い喋る猫が気配を絶つて海燕に話しかけてきた。

海燕は思わず声を上げて驚き、下駄帽子の男にも見つかってしまつ。

「おやあ？ 何処かで見たような顔ですねえ？」

「あ、あ、あ……」

海燕は下駄帽子の男を指を刺しながら驚く。

下駄帽子の男の名前は浦原喜助、元十一番隊隊長であり、技術開発局初代局長。

百十年前に尸魂界を追放され、それを最後に消息を絶つていた人物である。

海燕は最初こそ浦原を警戒していた物の、途中からすっかり馴染んでしまつた。

その理由は紺屋雨と花刈ジン太という少年少女にあった。

浦原に連れられ、恐る恐る浦原商店内に入った海燕を向かえたのが雨とジン太。

雨は内気で大人しく、ジン太は生意氣なヤンチャ坊主。

何処にでもいる様な子供達が信頼している様子から、浦原が悪人でない様に感じられたのだった。

尤も、子供達の戦闘力は人外そのものだが。

「ハア……戸魂界にて絶命した筈が現世にて靈子が再構築され、復活、ですか、前例の無い話ですねえ……」

浦原はその言葉の後にそもそも、と付け加え、話を続けようとする。現世は戸魂界と比べて靈子が薄い。

その上で靈子が人体を構築している死神が現世で復活するのはほぼ不可能。

「……自分の靈子にプラスされる靈子の塊が無ければ、ですがね」浦原の言葉に海燕はハツとする。

「そうです。恐らくあなたの体を乗つ取つた虛の靈子を吸収し、自分の靈子と混ざり合つて現世で復活した、と考えるのが妥当でしょう」

浦原の話を聞き、海燕は若干渋い顔をする。

当然だろつ。

虛は妻を殺した挙句自分の体を乗つ取り、仲間に怪我負わせたのだ。その虛のお陰で蘇つたとするなら、自己嫌悪にも陥ると言つ物だ。

＊＊＊

浦原との話し合いの結果、海燕は当分の間、義骸という、現世で死神が使用する、人形のよつな物に入り、虚退治をしながら浦原商店で居候する事になった。

浦原曰く、宿代は店の手伝いで良いらしい。

こうして、海燕の現世生活が始まった。

燕は再び羽ばたいた（後書き）

海燕は僕がBLEACHの中でかなり好感度上位だったりします。
もう全てがかつこよすぎる！！
でも僕が書くとかつこよくなのは何故！？
それでは次回もお楽しみに

燕は朽ちる女と玉笛つ（前書き）

タイトルでお察しかと思いますが、ルキアと再会します。
若干カイルキ氣味。

あ、でもくつ付いてラブラブ、と言ひ訳ではあります。
海燕には嫁もいたしね・・・

燕は朽ちる女と田舎つ

海燕が現世で生活を始めてから数週間、靈子の薄い現世でも問題なく生活する事が出来た。

さらに浦原から貰つた滋養剤で靈圧を回復させ、現世でも魂界と同じ様に活動できる。

因みに滋養剤には髑髏マークが書いてあって、飲むのに惑つたのは失笑物である。

そして日々、虚退治をする中、死神と虚の靈圧がぶつかっている、即ち戦闘している事に気付く。

「……あ、死神の方やべえな」

海燕は斬魄刀、捩花を携え、その場に向かおうとするが、浦原によつてそれを阻まれる。

浦原曰く、助けに行くのはもう少し経つてから、との事。

* * *

死神の靈圧は一瞬、薄くなつたが、その後直ぐに最初より増幅して蘇る。

海燕は不思議に思いながらも、浦原はこれ待つていたのだと察する。

「そ、死神サンの元へいきましょうか！」

浦原はいつもの格好で海燕と共に靈圧がある場所へと向かった。

「あ、あなたは……」

* * *

氣絶したオレンジ色の髪を生やした死神と白い着物を着た、力を失つた死神。

その死神が海燕を見て、驚愕している。

海燕の方はその死神を見て、驚くと共に嬉しそうな表情を浮かべる。

「海……燕、殿？」

海燕の名を呼んだ死神の名前は朽木ルキア。

海燕の嘗ての部下であり、自分を虚の呪縛から救つてくれた、女の死神。

尤も、ルキアの方は自分が海燕を殺したといつ自責の念に駆られているのだが。

「久しぶりだな、朽木！」

笑顔で自分の名を呼ぶ海燕にますます困惑するルキア。

海燕はどう説明しようかと悩んでいる。

「まあまあ、積もる話は後にして、今はこの少年とその家族の皆さん的手当をしましようか、もちろん記憶置換も忘れずに」

海燕とルキアは浦原商店にて、互いの状況等を説明しあう。

海燕は尸魂界で絶命した後、現世で復活、ルキアは現世に駐在任務を言い渡された後、オレンジ色の髪をした靈感のある少年、黒崎一護と出会いその家族が虚に襲われて、ルキアも負傷して一護に靈圧を贈りし、今に至る。

「……海燕殿の説明が異様に短いのは気のせいでしょうか

「あー、気にすんな、俺も今一自分の状況が良く分かってねえんだ」

そつ言づ海燕を見て、ルキアは突然ホロリと涙を流す。

海燕はルキアの頭を撫でた後、優しく笑いかける。

「申し訳ありませんでした……海燕殿！！」

ルキアは海燕の手を握り締め、海燕の生を実感する。

そして海燕はルキアの罪悪感を洗い流すようにルキアを抱きしめる。

「いいか、俺は虚に殺されたんだ。そして朽木は俺を救ってくれた恩人だ。朽木が気にする様な事は何一つねえよ。あの時、俺を救つてくれてありがとう」

ルキアは海燕の言葉一つ一つに涙を流し、全てが救われた。

燕は朽ちる女と田舎つ（後書き）

海燕をカツコよく書けない……他の方の作品でみた海燕は感動するほどカツコ良かつたんですけど……ああ、どうしてこうなった。

燕は護る者にて修行を施す（前書き）

海燕と一護の初対面です。

一護は恋次と白哉の登場の時までに原作より強くなるつもつです。

燕は護る者に修行を施す

ルキアの死神の力は現在、人間の青年、黒崎一護の中にある。

本来なら半分の力を渡した筈だが、何故か全ての力が一護に渡つてしまつた。

因みに原因は今の所一護の靈力が異様に高かつたから、としか解つていいない。

そしてルキアは一護に死神代行として働く事を承諾させた後、これから毎日特訓をしていく事になる。

だが、一護に修行を教えるのはルキアでは力不足、浦原では店の営業がある為忙しい。

すると当然

「今日からおめえに修行を教える志波海燕だ！よろしく！…」

と、なる訳である。

一護の反応は当然、誰だよ、となり、ルキアからは自分の上司、と説明される。

今一瞬に落ちない一護だが、強制的に体から魂魄を抜かれ、死神の姿になる。

その後海燕も義骸を脱ぎ、死神の本体が現れる。

「さて、修行第一段階だが……先ず一護、おめえには“始解”を習得してもらう！」

始解とは、死神の斬魄刀の一段階目の解放。

斬魄刀の持ち主によつて様々な姿形があり、能力も様々。

その名の通り直接攻撃を行う直接攻撃系、特殊な能力が備わつてゐる鬼道系と、様々種類がある。

「本当なら死神になつたばかりの奴に始解はムズインんだけどな……おめえは靈圧たけえから、ま、大丈夫だろ！」

いい加減に言う海燕を見て一護呆れた表情を見せるが、次の光景を見て、表情が強張る。

「水天逆巻け……捩花！」

海燕は刀を頭上に上げ、両手で器用に回転させる。

すると刀の形状が変化し、三叉の槍になる。

「俺の斬魄刀は捩花、つってな、水を操る流水系の斬魄刀だ……斬魄刀は解号と名前を呼ぶことで本来の姿を現す……一護の斬魄刀はどんな能力なんだろうな？」

海燕が得意げに笑うと一護は少し感心する。

自分の刀がどんな物なのだろうかと少しドキドキしてしまったのは内緒の話だ。

* * *

一護は現在、胡坐をかいだ膝の上に斬魄刀を置き、精神世界に入ろうとしている。

斬魄刀の始解に必要なのは対話と同調。

対話は斬魄刀の本体との会話、同調は本体との靈圧のシンクロを指す。

さらに斬魄刀との絆を深める事により、刀に眠る力が解放されていき、それは死神の鍛錬の一つでもある。

* * *

一護は精神世界の中でサングラスと黒いコートを着用した髭面の男性とで出会う。

一護は名前を聞くもその言葉の名前の部分だけノイズが掛かったようになに切れ切れになり、しつかりと耳に届かない。

「あんたが、俺の斬魄刀……か？」

一護は男性に自身の刀であるかを確認する。

男性はコクリと頷き、再び自分の名を口に出す。

「私はぜ……つだ。お前と会うのを楽しみにしていた、一護……」

「俺の名前をしってんのか？」

男性は再び頷き、自分が何であるかを話す。

「私はお前の力、そしてお前自身、……お前の知つている事は全て知つていて。そしてお前の知らない事も……」

一護は男性の言葉に耳を傾けながら、この人物が自分の斬魄刀、力の源である事を理解する。

「なあ、名前は聞き取れねえけど、いつか俺があんたの名前を聞ける様になつたら力を貸してくれるか？」

「私はお前に力を貸すときは出し惜しみをしない。私の名前が聞こえたならば、いつでも力を貸してやるつ……・・・」

「……つてな事を斬魄刀は言つていたぜ？」

一護は男性と話した会話の一部始終を海燕に話す。

海燕は公園のテーブルに座りながら一護の話を聞き、真剣な面持ちで相槌を打つ。

「ま、一回で名前が分かつたら誰でも死神になれらあな。そこまで会話出来ただけでも大したもんだ」

海燕は気さくに笑い、一護を好評価する。

一護は少し得意げになつた後、ルキアの方を見る。

「で、あいつは何してんだ？」

ルキアは真剣かつ緊張しながら大声でホラー漫画を音読しており、

その場に異様な空氣を流していた。

一護は自分の体に、海燕は義骸に戻った後で休憩中。
そして一護の背後に忍び寄る黒い影が一つ。

「くつろさつき、くーん！！」

「ぎやあ！？」

一護にいきなり声を掛け、驚かしたのは井上織姫といつ、一護のクラスマイト。

人間に扮して学校に通っているルキアは一瞬誰だか分からなかつたが、一護に教えられ、どこぞのお嬢様の様にスカートの裾を上げて挨拶する。

「あら、井上さん、ご機嫌よう！」

「い、ご機嫌よう！」

少々、といふか大分天然の氣がある井上はそれに釣られ、自分もスカートの裾を上げて挨拶する。

一護が心の中で井上にツツコミを入れたのは仕方のない事だらう。

「あれ、そつちの人は？なんか黒崎君に少し似てるけど……」

井上は海燕を見て不思議に思い、その疑問を素直に述べる。

海燕は何を言おうか迷つた後、似てるのは偶然で、自分は一護の昔の知り合い、と話す。

その様子から見て、嘘を付いているのはバレバレなのだが、井上には十分それで通じた様だ。

そしてルキアは井上の右ひざを見て、ある事に気付く。

「井上さん……その傷は……ちょっと見せてもらつてもいい？」

ルキアはその傷を見て、険しい表情を浮かべる。

そして海燕の顔を見て、互いに頷き合つ。

何がなんだかわから無い一護と井上はそろつて首を傾げる。

＊＊＊

三人は井上と別れた後、それぞれの家へと帰ろうとする。

海燕は浦原商店へ、一護は自宅へ。

この時、一護はルキアも海燕と共にいくのかと思つていたが

＊＊＊

ルキアは何と一護の部屋の押入れの中にいた。
しかも妹のパジャマを勝手に着ながら。

「一護……虚だ！！」

突然、ルキアが飛び出し、一護の魂魄を抜く。
そして一護がいた場所には巨大な虚の手があり、虚はそのまま家の
外へと逃げた。

「どういう事だ……今のは井上の兄貴だつた……！」
一護の部屋に沈黙が走つた。

燕は護る者に修行を施す（後書き）

原作に生き返った海燕が加わることの物語、一護&恋次&ルキアの輪
の中に海燕が加わる訳ですよ。
妄想全開です！いやつほつ！

燕は姫と巨人を助ける（前書き）

チャドと織姫の話。

燕は姫と巨人を助ける

一護とルキア、そして途中で合流した海燕が向かつた先は何と井上の自宅。

ルキアの話から魂魄は、虚に墮ちた後に先ず身内の魂を食らうという事から虚、もとい井上の兄は先ず先に妹である織姫を襲うと予想する。

一護は相手がクラスメイトの兄であるという事から、斬る事に戸惑うが、海燕の話から戸惑いは決心へと変わる。

「虚を斬魄刀を斬るつて事は罪を洗い流すつて事だ。心を洗い流し、戸魂界にいける様にしてやるんだ。殺すんじゃねえ、昇華してやるんだよ」

井上の兄なら生前に大きな罪は犯していないはず、そう確信した一護は屋根を駆ける足のスピードを上げる。

一瞬、一護の背中に乗っていたルキアが振り落とされそうになつたのには、海燕も思わず笑つてしまつ。

井上の兄との戦闘の後、井上とその兄が和解し、兄は正気を取り戻した。

そして自分で刀を仮面に突き刺し、戸魂界へ昇華していった。

海燕は一護の修行の為、終始見てるだけで終わり、井上と遊びに来ていた有沢竜貴に記憶置換を終えた後で一護の肩を強く叩く。

「兄貴の存在理由がなんたるか……いつちよ前な事言いやがつて、この、この…」

海燕は一護の頭をロツクし、拳骨を捻じ込む。

一護は井上の兄に兄弟で兄が何故先に生まれてくるかを「」と話した。

兄は後から生まれてくる弟や妹を護る為に生まれてくる。

だから兄が妹に向かつて“死ね”等とは間違つても言つた、と。

「でもよ、俺もそう思うぜ？兄貴が何で先に生まれて来たのかがよ？」

＊＊＊

海燕には妹と弟が一人ずついるという。

海燕曰く、どつちも口より先に手が出る頭の足りない馬鹿、との事だが、一護は密かに海燕も似たような物だと思つた。

＊＊＊

織姫の兄の一件が片付いたその数日後、一護達はさらなる事件に巻き込まれる。

一護はルキア、海燕と共に一体の虚を追いかける。

名前をシユリーカーという、生前、連續無差別殺人という犯した根本から“悪”の外道だ。そしてさらにその虚が追つてゐるのは茶渡泰虎という、一護の親友であり、通称をチャドという。

正確にはシユリーカーが追つてゐるのはチャドが抱えているインコで、インコの体の中にはシバタコウイチという少年の魂魄が入つており、シユリーカーはその少年に三ヶ月間自分から逃げる事が出来たら母親を生き返らしてやる、という真赤な嘘を語る。

そしてシバタを助けに来た死神達を襲い食つていたという。

「野郎……とんでもねえ外道だな」

海燕はシバタの事を想い、思わず表情を険しくする。

「間違いなく奴は地獄に落ちるでしょう……」

ルキアの言つ地獄に落ちる、とは一般の人間が言つような悪い事をするどーの類では無い。

本当に落ちるのだ。

先日海燕が行つたように斬魄刀で虚を斬ると罪を洗い流し口^ノ魂界へと送られる。

だが、洗い流せるのは虚になつた後の罪であり、生前に大きな罪を起こした虚は地獄に引き渡す契約になつてているといつ。

＊＊＊

途中の道で一護は妹である夏梨を見つける。

「一護！お前はその娘を家に連れて行け！！あの外道野郎は……俺がとつちめる！！」

海燕は義魂丸を飲み込み、義骸を脱ぎ去る。

そしてルキアと共にシユリーカーの下へと急ぐ。

＊＊＊

『そーら、逃げろ逃げろお……早くしねえと俺のビルが爆発するぜえ！』

シユリーカーは舌の笛で爆弾である蛭を爆発させていく。

恐怖感を煽る為に、中のギリギリの所でかわさせる。

「ム……！」

チャドはシバタの入つた鳥籠を自分の両腕で蛭の爆発から護る。

「ダメダメ！ オジチャーンシンジャウ！」

シバタは必死にチャドを止めようとするもチャドは危険をかえりみずすにシバタだけを護まつつとする。

それは死んだ祖父の言葉から来るものであり、チャドはシバタをシユリー・カーから護る為に自分を犠牲にする。

『ほーらー！ 油断してると……』

シユリー・カーは何時間にかチャドの直ぐ真上で飛んでおり、爆弾である蛭をチャドに投げつける。

『死んじまうぜええ！ ……』

蛭がチャドに当たる寸前、その蛭は何かに吹っ飛ばされ、その蛭は遠くで爆発する。

「てめえは俺がぶつ飛ばす！」

海燕がルキアと共にシユリー・カーの元へ駆けつけ、シユリー・カーは新しい玩具が増えたとばかりに気味の悪い笑みを浮かべる。

一方海燕は解放前の斬魄刀を構え、シユリー・カーを睨みつける。

「もう一度言つぜ…… てめえは俺が……」

海燕は瞬歩でシユリー・カーの後ろに回りこむ。

「ぶつ飛ばす！」

海燕とシユリー・カーの戦闘が始まった。

燕は姫と巨人を助ける（後書き）

この小説での海燕の初戦闘。

海燕は“通常なら”圧勝する筈ですが……！？
次回をお楽しみに。

燕は魔に蝕まれる

海燕は解放した自身の斬魄刀を構え、シユリーカーに斬りかかる。ルキアは現在靈力が僅かしか持ち合わせていないので、チャドヒシバタを非難させる事に専念する。

「転校生……さつき俺を追っていた奴は一体何なんだ？」

チャドはルキアにシユリーカーの事を訪ねる。

尤も、チャド自身にはシユリーカーの事は見えてもいなければ声も聞こえないのだが。

「案ずるな……奴は直に地獄に落ちる」

ルキアの言葉に疑問を覚えながらもチャドは黙つてルキアの隣に立つ。

海燕は捩花から溢れ出る水流をシユリーカーに向け発射する。

シユリーカーはそれを全て避けるが、時々掠つてもいる。

海燕は元護廷十三隊、十三番隊副隊長だ。

シユリーカーは死神を二人ほど食らつており、靈力もそこそこ高い。だが所詮はそこそこ、であり本物の実力と経験を重ねた海燕には遠く及ばない。

「テメエの悪事も此処までだ！地獄に落ちて反省しろ！…」

地に落ちたシユリーカーに海燕が斬りかかる。

が、海燕の手はシユリーカーに当たる寸前で止まり、もう一方の手は自身の頭を押さえる。

突然、海燕に頭痛が襲つたのだ。

「ぐううう！？何だ……こんな時に……ぐああ！」

海燕は遂に捩花を手から放し、地面にのた打ち回る。

これを好機と見たシユリー・カーは、一旦距離を取り、大口を開けて海燕を食らおうとする。

『テメエは俺の三人目の餌だ！ 美味しく頂いてやるぜえ！！』

シユリー・カーの歯が海燕の肩に食い込む。

頭と右肩、両方の痛みが海燕に身体を襲い、肩からは血を流す。

『ん？ なんだ？ この匂いは…… そうか、テメエも俺と同族じゃねえか？』

『どういう…… 事…… だ』

海燕はシユリー・カーの発言に疑問を覚えながらも捩花を握ろうとする。

だが、如何せん、手に力が入らず、捩花は虚しく地面に転がる。

シユリー・カーは今度は海燕の腕に噛み付く。

シユリー・カーは海燕の腕から離れようとせず、海燕の肩から鮮血が舞う。

だが、シユリー・カーの仮面に一閃、刀傷がつく。

一護が戻ってきたのだ。

「大丈夫か海燕さん…… 何があつたか知らねえけど、あんたがそんなになるまでやられるつて事はあいつ、強えのか？」

一護はまだ名前の分からぬ斬魄刀を抜き、シユリー・カーの方を向く。

そして一瞬でシユリー・カーの背後へ回る。

海燕から教わった“瞬歩”を使用したからだ。

一護は巨大な斬魄刀でシユリー・カーの背中を斬り裂き、次に足を刀で串刺しにする。

『ぎやああ！！』

「わかるか？ 狩られる奴の恐怖が？」

シユリー・カーは自分で足を引きちぎり、空中へ逃亡する。

「そうだ、自分で足を千切つて逃げたくなる程怖えだろ？ …… その恐怖を、たっぷり味わいやがれ！！」

一護は空中までシユリーカーを追いかけ、仮面を貫く。

するとその空間から大きな門が現れる。

これは地獄の門、生前に罪を犯した虚を裁き、地獄に閉じ込める為の入り口。

シユリーカーは大きな刀でその身を貫かれ、大きな笑い声を上げる地獄の使者と共に地獄に落ちた。

一護達はシバタの魂魄を元の身体に戻そうと試みたが、体と魂魄が長く離れすぎた為、因果の鎖が既に切れていた。

その為、シバタは戸魂界へ送られる事になる。

チャドはシバタと別れの挨拶をした後、ルキアに記憶置換をされて虚に関する記憶が全て消された。

一護は傷ついたチャドを自宅、つまり黒崎医院に連れて行つた。

一護と分かれた後、海燕は浦原に先ほどの頭痛の事を話す。

「……そうですか、確かに虚は、志波サンの事を同族、と言つたんですね？」

海燕は浦原にああ、と返事をした後、どういつ事かを尋ねる。

「えー、とにかく、死神にそう言う症状が過去にも確認されていてねえ、専門家を紹介しましょ。その人達はそういうの大得意ですから」

海燕は浦原に連れられ、ある場所に向かつた。

燕は魔に蝕まれる（後書き）

タグの内なる虚…（タメ）…ですね。
そして海燕の内なる虚は……おつと、危ない危ない。
次回をお楽しみに。

燕は仇と出会つ

海燕が浦原に連れられていつた場所とは、空座町の外れにある倉庫。さらに倉庫の地下には広大な空間が広がっており、浦原商店の勉強部屋に心なしか似ている。

違う所と言えば温泉がない事と何故かキッチンがあることだ。さらに言えば隅には某少年漫画や成人向け雑誌が綺麗に積み重なつていた。

「皆さーん！少し用事があるのでーーー！」

浦原が大声でこの空間の主を呼ぶ。

すると数人の男女が瞬歩を駆使してその場に姿を現す。

「何や、浦原？そいつ死神やろ？」

おかげで頭の青年、平子真子が海燕を指差す。

海燕の頭の中にはこいつ、何処かで見たことがあるな、という疑問でいっぱいだった。

当然だろ？

此処にいる男女等は過去に一人を除き護廷十三隊の隊長、副隊長だつた者達である。

平子真子を筆頭に猿柿ひよ里、愛川羅武、鳳橋樓十郎、矢胴丸リサ、六車拳西、久南白、そして元副鬼道長、有昭田鉢玄のメンバーで構成されるのが仮面の軍勢という集団である。

＊＊＊

浦原が海燕を此処に連れてきた理由は海燕の頭痛の原因にある。それは海燕が現世に復活する経緯にあつた虚の靈子を吸収した事から海燕の中に入なる虚が巢食つてしているので無いか、という事。

この仮面の軍勢は嘗て死神でありながら虚の力を手にしてた者達であるといつ事から此処に連れて來たのだ。

そして元五番隊隊長、平子真子が調べた結果、案の定海燕の中に虚の存在があつたといつ。

「ど、どうすりや俺の中の虚を追い出せるんだ?」

海燕の問いに平子はチツチツチ、と指を鳴らす。

「追い出すことは出来へん……飼い慣らすんや、自分の方が強い、つて叩き込んでな?」

平子の後に、元十一番隊副隊長、猿柿ひよ里がにやりと口角を吊り上げる。

「これはワレが“元”死神やから協力するんやぞ? 現役の死神だつたら放つておいたわ!」

この少女は死神や人間といった存在を嫌つており、それらの存在は殺すのも躊躇わない。

それをいつも平子が止め、ひよ里が平子をどつづのは平子にとって災難である。

三時間前、平子によつて意識を落とされた海燕の姿は段々と虚のそれへ変わつていつた。

それを鉢玄、通称ハツチの鬼道によつて結界を張られ、仮面の軍勢がその中で順繰りに虚かした海燕と戦つ。

海燕の精神世界には海燕と同じ姿、唯一つ違つ所は色が全体的に白い所だろうか、その姿をした虚がいて、海燕に話しかけた。

『久しぶりよの、この世界の王よ……』

その声は虚独特の地に響く声をしていた。

そして海燕は虚の久しぶり、という言葉に疑問を覚える。

「お前なんか知らねえよ、生憎俺には虚の知り合い何かいねえんだ」

海燕がそういうと虚は一タリと口角を吊り上げる。

『……うむ、こりこえれば分かりやすいかのう？“貴様の女は美味かつた”ぞ！』

瞬間、海燕は刀を抜き、虚に斬りかかる。

すると虚は素手でそれを受け止め、真剣白刃取り宛らの状態となる。

「てめえ……あの時の虚かよ……！…」

海燕は物凄い形相で虚を睨み付ける。

一方、虚は薄ら笑みを浮かべたまま、片手を離し、腰に刺してある刀を抜く。

そして海燕の頭に振り下ろすが、海燕はそれを瞬歩で避ける。

「テメエが俺の中にいるとはな、胸ぐそ悪いっていつたらありやしねえ……」

海燕は内心で舌打ちをして虚を睨み付ける。

相変わらず薄気味悪い笑みを浮かべたままの虚は刀を頭上に上げ、くるくると回し始める。

「おー……その動作は……」

虚は笑みを絶やさず、海燕のほうを見る。

『水天逆巻け……捩花アア！…』

虚の刀は白い色をした捩花となり、槍の先端から水流を発射する。海燕も、自身の刀を解放した後、同じ動作をする。

「何でてめえが捩花を使ってやがる！？」

『当たり前であろう……我は貴様、貴様は我なのじゃ！…同じ技を使えて何の不思議がある！？』

虚は笑い声を上げながら海燕に斬りかかった。

燕は仇と田舎つ（後書き）

やはり海燕の内なる虚はメタスタシアでしょ、つ、と思ふ、こんな話になりました。

口調が良く思い出せない……

次回をお楽しみに

燕は魔を征する

精神世界で海燕が虚と戦つてゐる一方、現實世界では元九番隊隊長、六車拳西が虚化した海燕と戦つてゐた。

拳西の斬魄刀は断地風たちがぜというコンバットナイフだ。

能力は糸状の風を打ち放ち、相手を切り裂くという、海燕の水流を放射する捩花と属性こそ違う物の、少し似てゐる所がある。

尤も、海燕は現在、虚化していく、斬魄刀の能力を比べる事は出来ないのだが。

『ギヤオオオオオオ!!』

啼き声、姿共に虚のそれとなつた海燕の髪は蛇のよつになつており、体からはいくつもの手や足が生えていて、それはまるで海燕の体を乗つ取つた虚、メタスターの様になつてゐる。

「ちつ、この馬鹿野郎が!! 早く帰つてきやがれ!!」

今拳西が相手にしている虚は元々は海燕の物である体を使つてゐる為、戦闘力も半端なく高い。

元隊長である拳西も虚化すれば元副隊長である海燕を簡単に倒す事が出来るのだが、この戦闘の目的は海燕を倒す事ではなく、海燕が“戻つてくる”までの時間を稼ぐためである。

「拳西……交代や」

元八番隊副隊長、矢胴丸リサが結界の中に入り、拳西とバトンタッチをする。

「海燕……つていつたつけ? 悪いけど、手加減はせえへんで、覚悟しどき!」

リサは斬魄刀を鞘から抜き、瞬時に開放する。

「潰せ! 鉄漿蜻蛉はぐろとんぼ!!」

すると刀身が槍の様な、矛の様な姿に変形し、リサはそれを構えた。

虚化した海燕は口を大きく開け、口内にエネルギーを溜める。

それは虚閃セロという、大虚や破面特有の技、靈圧で構築されてゐる、

破壊の閃光で、虚の力を使う仮面の軍勢も使う事ができる。
海燕は虚閃を放った後、リサに向かつて飛び掛けた。

精神世界で海燕は自分の姿をしたメタスタシアとの戦闘で、相手を劣勢に追いやっている。

「おい！ テメエはそんなに弱い癖して、都を殺したのか！ ？ ふざけんじゃねえ！ 本気を出しやがれ！ ！」

海燕は許せなかつた。

自分の愛するものがこんな弱い者に殺されたのかと思うと。

しかしその瞬間、海燕の手から捩花が消え去り、メタスタシアは自身の持つ“捩花”で海燕を斬りさいた。

『ククク……忘れた訳ではあるまい？ 我には一日で最初に触れた物の斬魄刀を消滅させる事ができる……』

海燕は腹から血を流しながら、メタスタシアを睨み付ける。

「ああ、覚えてるぜ、だがな、俺はお前に勝たなきやならねえ、都の為にも、俺の為にもな……」

海燕はそういつた後、ブツブツと何かを唱えるように呟つ。

『散在する獣の骨・尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪・動けば風・止まれば

空・波打つ音色が虚城に満ちる……破道の六十三、雷吼炮！ ……』

メタスタシアに雷を帯びた爆風が襲い、メタスタシアは感電してしまつ。

さらに

「破道の五十四、廃炎！」

円盤状の炎がメタスタシアの顔面に中り、メタスタシアは苦しみ、悶える。

海燕は血を流しながらゅうりとメタスタシアの目の前に立つ。

「少しばかつたか？都の苦しみが、テメエ如きに喰われた無念が！テメエは今此処で、消滅するんだよー！」

海燕は破道の二十一、赤火砲を零距離で放ち、自分ごとメタスタシアを攻撃する。

メタスタシアの右腕がだらりと下がり、音を立てて地面に落ちた後、黒く変色しながら消滅していく。

『ぐ……しょうがない、今は貴様に王の座を沸け渡して置いてやろう……しかし貴様が弱みを見せた時、私は貴様の全てを喰らう……そしてあのルキアという女の死神を……』

それだけ言うとメタスタシアは消滅し、海燕は仇を討てたと言つのに、まだ浮かない表情をしていた。

「都……」

現実世界にて、現在は愛川羅武が戦つており、最後にもう一度拳西の順番になる事で、その時点で海燕を殺す事が決定している。

「早く、戻つて、来いよ！海燕！－！」

言葉を途切れ途切れに、一息毎に海燕を攻撃する。

すると一瞬、海燕の動きが止まり、天に向けて咆哮を上げる。そして虚の皮が剥がれて行き、中か元の姿の海燕が姿を現す。

「……やつと戻つてきやがつたか……」

拳西が毒づくと元九番隊副隊長、久南白が額に伝づ汗を拭いながら溜め息をつく。

「カイン、やつと帰つて來たんだねー」

カイン、とは海燕のあだなで、白は拳西以外の仮面の軍勢メンバーの名前後に“ん”を付けて呼ぶのだが、海燕は元々最後に“ん”が付くので、本人なりに悩んで考えた結果、カイン、と呼ぶことに

した。

海燕は目を開け、一息ついた後、皆に謝罪をする。

「迷惑かけて、悪かつたな」

頭を下げる海燕にひよ里が飛び蹴りを食らわす。

「悪かつたな、じゃ無いわ、ハゲ！！そこは申し訳ありませんでした、ひよ里様、やろが！！」

「何でテメエ限定で、しかも様付けで謝らなきゃなんねえんだよ！」

！」

海燕は仮面の軍勢一人一人に礼を言つた後、浦原商店に帰つていつた。

そしてこれから毎日虚化の修行をする事になったのだが、海燕は最初から十五時間以上虚化出来たと言つ。

本人曰く気合、らしい。

燕は魔を征する（後書き）

今回海燕が使つた鬼道ですが、原作では一切使っておりません。

天才である海燕なら使えるかな～という勝手な予想と、死神じやない妹、空鶴が使つてるから死神で兄である海燕が使つてもよくね？と言つ事から雷吼炮とそれ以下の鬼道を使わせました。

原作で空鶴は詠唱付きで使つていたので、海燕も詠唱付きで。

それと零距離赤火砲ですが、一護や恋次とタイプが似ている海燕なら恋次と同じ事思いつくかな～と。

言い訳ばかりですが、これからもこの作品をよろしくお願いします。

燕はキング オブ ハーモーク(?) ハモウ(記書き)

キングオブニュー・ローク……ブリー・チを最初の巻から読んでいる方はネタが分かると思います。

燕はキング オブ ニューヨーク(?)と出金づ

現在海燕は一護に斬魄刀との対話をさせている。

斬魄刀との対話は自信の力を引き出す為に重要な事であり、それを行う事で本体との絆を深める事が出来る。

そしてここ一、二日で一護はようやく斬魄刀の名前を聞き出すこと

が出来た。

名前は斬月、解号の無い、常時開放型の刀で、攻撃力に特化している。

一護によると、斬月はまだ力を隠し持っているらしいが、それもその内引き出せるだろう。

＊＊＊

朝の鍛錬を終え、一護は学校へ向かう。

学校の友人にはもちろん死神の事は秘密であり、虚の事や、自分が靈が見えるという事に関しては一切話していない。

一護が学校へ行っている間、海燕は仮面の軍勢の元へ向かう。

「おーい！修業に来たから開けてくれ！！」

倉庫のシャッターの前で海燕が叫ぶと、内側から元三番隊隊長、鳳橋楼十郎通称ローズの声が聞こえた。

「オーケー、今開けるから待っててよ」

ガラガラとシャッターが上に上がり、ローズがはい、と少々気障に海燕に手を振る。

海燕はそれを気にすることなく、よう、と軽く挨拶をし、地下へと向かう。

海燕が準備運動に腹筋をしてると突然、鳩尾にひよ里の飛び蹴りに入る。

「おいコラハゲエ！－暑苦しいから余所でやらんかいボケ！－」
その表情は悪戯っぽく、尚且つ楽しそうな顔をしているのには気付かず、海燕は涙目になりながらひよ里の首根っこを後ろからつかむ。「こんのガキ……何すんだよ」

海燕が表情を引きつらせながら言つて海燕の顔面にひよ里の拳が入る。

「だ～れが餓鬼や！－うちは大人の女性やっちゅーねん！－ワレの眼は節穴かい！ハゲ！－」

その後、海燕とひよ里の楽しい追いかけっこが始まったのには仮面の軍勢の面々はひよ里を生温かい眼で見るほか無かった。

海燕とひよ里、互いに頭にたんこぶを作つた後で、虚化の修業をする。

海燕は白同様、一五時間以上虚化を出来るのだが、海燕のもつと伸ばしたいという向上心から、さらに修業を行つ。

海燕の修業の相手を行うのはいつもひよ里だ。

ひよ里は楽しそうに、尚且つ生き生きと海燕と戦闘を行う。

「水天逆巻け……捩花ああ！－」

海燕の斬魄刀から水流が発射されるが、ひよ里は自身の斬魄刀、^{くびきつおね}“**馘大蛇**”の腹でそれを防ぐ。

馘大蛇の形状はひよ里と同じぐらいの大剣。

ひよ里は馘大蛇を両手で持ち、海燕に攻撃していく。

海燕はそれを上手く捩花で弾いていく。

「せっかく虚化したんやから……これぐらいせんかい！」

ひよ里は仮面の口を大きく開け、虚閃を放つ。

海燕は捩花から水流を発射し、相殺しようとするが、如何せんひよ里の虚閃の方がパワーが上だ。

虚閃によつて、後ろに吹つ飛ばされた海燕の前にひよ里が仁王立ちをする。

「なんや、もう降参か！？ よつわいのう！！ ほれほれ、敗者は勝者の靴の裏を舐めるルールやぞー！ はようしごー！」

海燕はそんなルール聞いた事が無いと頭の中で思い、ひよ里の足を手で弾く。

「だれが舐めるかよ、俺はまだ負けてねえ」

「上等ーー！」

「ひよりん、楽しそうだね～」

白が寝転がり、頬杖を付きながら一人の戦いを観戦する。

さらに拳西が料理をしながら呆れたようにひよ里について話す。

「良い遊び相手が見つかってはしゃいでんだろ」

そろそろ一護が学校から帰る時間になり、海燕は浦原商店に一時帰宅する。

その時にひよ里が不満そうな顔をしたのはまた別の話だ。

「さて、一護ん家に行くか、」

海燕は店から出て、一護の家へと向かつ。

その途中で見覚えのある少年が住宅地の屋根の上を歩いているのを

見かける。

尤も、それは歩いている、というより跳ねている、という表現をした方が正しいのだが、それは今はどうでもいい。

「一護……じゃねえよなあれば？……まさか、改造魂魄がありやあ！？」

改造魂魄、とはその昔、護廷十三隊の十一番隊、つまり技術開発局が作り出した対虚用の兵士であり、死体にそれをいれて戦わせる、という計画により作り出された。

尤も、それは死体を戦わせる、という非道さから廃案になり全て廃棄されたのだが。

つまり今海燕の前にいるのはその廃棄から逃れた生き残り、という事になる。

そして今改造魂魄が入っているのは一護の体、という事は何が何でも止めなければならない。

「待て。待ちやがれー！！」

海燕が追いかけてきたのに気付いた改造魂魄は捕まつてなるものなのかと速度を上げる。

海燕は瞬歩を駆使して追いかけるが、この改造魂魄は下半身を強化しており、足の速さは半端じゃない。

＊＊＊

吾輩は改造魂魄である、名前はまだない……なんてな、ジョークジョーク。

まあ嘘では無いけどな。

俺様は廃棄される恐怖から逃れて町を自由に散歩中。

馬鹿な人間の体に入っているのが少し不満だけど……人間達の視線がめっちゃ気持ちいい！！所が、その途中で死神が追いかけてきや

がつた！！な・ん・で！？この町の担当はあの黒髪の姉さん一人じやなかつたのかよ！？嗚呼、綺麗なお姉さん！何処かに居たら可哀そうな俺を助けて！！

＊＊＊

改造魂魄が内心で叫び声をあげながら海燕の追跡から逃げる。海燕は息を切らせながら瞬歩の速度を上げる。

途中から、一護とルキアと合流するが、途中で虚の反応があつた。何故か改造魂魄もそちらに向かい、三人はそれを疑問に思いながら改造魂魄を追う。

＊＊＊

芋虫の様な虚と戦闘しているのは改造魂魄。

何故改造魂魄が虚と戦闘をしているかといふと、その理由は彼の生い立ちにあつた。

生まれた次の日には自分の廃棄する日が決まっており、毎日を怯えて過ごした。

そして偶然、普通の義魂丸に混ざり、廃棄を逃れる。

だが、いつか見つかって廃棄されるのではないかといふ恐怖を感じながら現世で浦原の元へ辿りつく。

そして“粗悪品”的箱に入れられ、遂に廃棄されるのかと思つた矢先に、雨の手違いにより、自由を手に入れる。

その経験から命は誰かが勝手に奪つていいものではないと感じるようになり、彼は誰よりも殺生を好まない。

そして先ほど、虚が現れた場所には子供達の姿があり、改造魂魄はそれを救う為に虚の居る場所へと向かつたのだ。

＊＊＊

改造魂魄の戦闘に、一護と海燕が加わり、虚は昇華される。その後、蟻を潰しそうになつた虚を改造魂魄が蹴り上げて、建物から落下しそうになるなど、ハブニングもあつたが、この一件は落着するかと思つたが、そこに浦原がやってきて改造魂魄を廃棄すると言ひだすが、ルキアが浦原から改造魂魄を奪い取り、一護の義魂丸はこれでいいといふ。

「知りませんよ……何かあつたらあたしは姿を晦しますからね……」

「元々靈法の外で動いてる貴様らだ、何も問題は無いだろ?」

画して、改造魂魄のコン（命名一護）が黒崎家に厄介になるのだが、一護がこの先自分の義魂丸がコンでよかつたと思つのはまた別の話だ。

燕はキング オブ ハードコア(?) ハード(後書き)

「」の登場です

コンカッコイイしかわいいしで好きです
テレカブリーチで特別嫌いなキャラってルピ以外いない気がします。

一番好きなのはマユリ様です。

他にも剣ちゃん、海燕、えとせと…

因みに今回のひよ里と海燕ですが、海燕にならひよ里も心を許すん
じやないかなあと妄想です。

浦原の前の十一番隊隊長（名前忘れた）は母親を慕つかのようじ懷
いていたと言つので、海燕はお兄ちゃんで良いかな、と。
尤も、ひよ里は素直になれない反抗期のお子様みたいになつてます
が。

それでは次回をお楽しみに

燕は……（前書き）

今日は殆ど一護のターンです。

燕は……

息を切らし、憎き親の仇を討とつと自身の斬魄刀、斬月を振り下ろす。

対して、その虚はそれを軽々と避ける。

上を良く見れば雨雲が空を黒く染める。

一護は“六年前の今日”を思い出しながら、母親の敵、グランドフイツシヤーを睨み付けた。

* * *

それは数時間前に遡る。

その時は雨の気配など無く、外には晴れ渡る空が続いていた。

一護の部屋の押入れに住み着いているルキアと、何となく部屋に上がった海燕に一護があるお願いをする。

「死神業を休みたいだと？ 戯けめ！ そんな事が許される訳……」

ルキアの口を両手で塞いで海燕は一護に理由を聞く。

一護曰く、明日は墓参りだそうだ。

それも自分の慕っていた母親の

ルキアもそう言われて却下する訳にもいかず、渋々一護が明日は死神業を休む事を承諾した。

そして、最後の一護の一言が無ければ、黒崎家だけで行かせる心算だった

「明日はお袋が死んだ日 いや、“殺された”日だ」

一護の部屋に、暫らくの間沈黙が走った。

「おい、ルキア……オメエ本当にについてくるのか？今日ぐれえ家族だけの時間をだな……」

海燕の言葉を聞いて、ルキアは一回目を閉じて、言葉を整理した後、海燕の言葉に返答する。

「一護は母親が殺された」と言つてありました。それは若しかしたら虚の仕業という可能性もあります。それを一護から聞かなければ……

ルキアの主張に海燕は盛大に溜め息を付く。

まるで融通の利かない妹に世話を焼く兄の様に。

「わあつたよ……お前がそこまで言うんなら俺もついていく」こうして、家族団欒の一時をルキアと海燕が邪魔をする事になったのだが、この時になつて、この選択は正しいと思つたのだった。

＊＊＊
大好きだつた　　否、今でもお袋は大好きだ。
俺のせいで死なせてしまつた、家族の中心であるお袋を。

それは俺のせいでもあり、今、目の前にいる薄汚い虚のせいでもある。

こいつを倒す事で、お袋に償いが出来るのなら俺は

「俺はテメエを倒さなきやいけねえ！－」

一護は気合を入れるように吼え、グランドフィッシュヤーに斬りかかる。

石垣の上でルキアと海燕が一護と、その戦闘の行方を見守る。

腹から血を流しながらも、何かに取り憑かれたかの様に、一心不乱

にグランドファイツシャーに斬りかかる。

だが、グランドファイツシャーは頭に付いている疑似餌を一護の母親の姿に変え、一護の攻撃の手を止める。

「止めて……一護、刀を引いて頂戴……母さんを斬らないで……！」

グランドファイツシャーが一護の母親、真咲を利用したのが運の尽きだった。

何故なら、これで“グランドファイツシャー”は“一護”を完全に怒らせてしまったのだから。

「こんなところに……お袋の姿を垣間出してんじゃねえよ……」

一護は斬月を握り締め、溢れる力を確かに感じる。

そして、刀からは声が聞こえ、一護はその声に耳を傾ける。

『一護……この外道を許してはならない。叫べ……！それはお前だけの力だ』

一護はグランドファイツシャーの顔を睨みつけ、声を高らかに叫ぶ。

「月牙……天衝！！」

白い三日月型の斬撃がグランドファイツシャーの仮面を割り、そのまま胴体も真つ二つに割る。

だが虚の弱点である仮面を割つても直ぐにグランドファイツシャーが消滅する事は無く、まだ口も利ける状態である。

『クツクツク……ワシを殺して満足か？だが、貴様の母親殺しの罪は消える事は……』

ザク、とグランドファイツシャーの腹に斬月の刃が突き刺さる。

一護は無言で、汚物を見る様な目でグランドファイツシャーを見つめる。

『そうだ、俺の罪は消えない……俺がテメエの罠に引っ掛かりさえしなけりやお袋は死ぬ事が無かつた』

だから、と刀を振り上げ、グランドファイツシャーに止めを刺そうとする。

「俺がお袋を殺したから、だから償いに少しでも多くの人間を護る

んだよ！！」

斬月は、確実にグランドフィッシュヤーの仮面を捕らえ、その後で黒く変色し、グランドフィッシュヤーの体は消え去った。

グランドフィッシュヤーを倒した後で、呆ける一護の肩に海燕が手を置く。

そして唐突に、一護にある、質問をする。

「一護……心つてのは何処にあると思つ？」

海燕は昔、ルキアに問いかけた事と同じ事を問つ。

一護は当時のルキアと同じく、自分の胸に手をやつ、其処に在る、と答える。

海燕は予想していた答えに苦笑した後、それは違うと言つ。

「心つてのはな、此処に在るんだと、俺は思つ

そついつて海燕は自分と一護の間に拳を置く。

心は誰かと誰かと触れ合つた時、其処に生まれるのだと、海燕は言う。

「オメエのお袋さんは、死んだ時に一護に心を預けたんじゃねえのか？お袋さんが、一人で死んだ時、オメエは傍にいたんだろ？だからお袋さんの心は一護の中にあるんだ」

海燕が諭す様に一護に言つと一護は俯き、「へせえよ」と一言言つた。

その後、二人の殴り合いの喧嘩が始まったのだが、それは一護に取つて、気持ちを切り替える事が出来るいいチャンスだった。

燕は……（後書き）

海燕にカツコイイ事言わせよ!と思つたのに全然かつじよくならない……

何処かに文才落ちてないでしょ!つか。

見つけたら自分のところまでお届け下さい（笑）

此処からは、話を考えたはいい物の、入れる場所がない事に気付いてお蔵入りになった話。

浦原商店の一室でルキアともう一人、金髪の少女、猿柿ひよ里がにらみ合っていた。

それに巻き込まれているのは、否、むしろ争いの中心となっているのは海燕だ。

それは数時間前に遡る。

仮面の軍勢のメンバー、猿柿ひよ里が浦原商店の近くを通りかかった時、中から海燕の声が聞こえたので、中を覗いてみた。

すると其処には海燕と談笑をする女性、朽木ルキアの姿があった。何故か無性に腹立たしくなり十足で店内に入る。

「おい!ラーハゲツバメエ! その馬鹿面女はなんやねん! らーー!」
ひよ里が怒鳴るのを見て、ルキアが若干眉を吊り上げながら海燕に尋ねる。

「海燕殿……この教育のなつてない子供は何者ですか……?」
この一言が切っ掛けで、冒頭に繋がる。

見たいな感じでワードに書いてみたんですが、入れる場所が全然無いので此処に書きました。
評価等はこれ抜きでお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3718y/>

強き燕は二度羽ばたく

2011年11月20日09時40分発行